

明治七年

起死回生 寶丹

正味秤量

八分錫	八	新器定價	金拾
貳分三分錫	八	大器定價	金貳拾
壹分四分錫	八	中器定價	金拾貳
五分錫	八	小器定價	金六
			銀貳毛

夫暴瀉の病なるや、山名アヂマセコレラといふ原異邦より起て近來其餘疾皇國小傳流まる所といふ皆急症小一くも傳アの大患あると皆人のたすけり○按き

此夜去安政度時大流行後半年終行行多そ是々急死をとり少か

今時再大流行といふも此先年衆医其治法を得られ推想して人異物と云ふは然らず

若僻邑ハ多論た繁華の地といふも深夜卒小此疾を發するも直防の藥ハ醫師

凡平日此等の防藥を貯置宜急卒の用備其機大の禍を免ふべき也

文久二年壬戌八月日

九世

守田治兵衛 圖目

寶丹を服して暴瀉病及霍乱を救ふ事

凡人氣分つふから只大便せんと欲し一廟ふいと忽大心倒と瀉と然も悲痛

必この惡度小罹の始より早く此藥量二三分冷水を服 身は

暖ふ臥をせしめ心氣を安んず一猶頻大便下しんは氣味を再

猶その後暖に臥てあき手足面部と漸く温氣を生じ從て全身悉く汗を發 後

小便の利きるとあき一如此汗發 小便の通利を得是必其病治るの機なり

右の如く早くこの子りを用ふるハ医療ともかり能一命を救ふを得

按むる小人暴瀉の惡症を患ふ初一泄して其夜たらんと知り早く此等の防藥を用

ざる及て暴瀉の病名を忌むのあきりて尋常の時候ありては

格別のことも思はざらん手あられあり終小救ふべき此類の世間

多一取患の甚しき一凡此症二三度もなり或ハ吐をあらふも前

平心得ありて病症のつらさうら薬を用る度肝要

病症取る者一時吐瀉して二三度ももさし忽頭面手足も小厥冷又ハ

屈氣息絶つとあり然も胸中温あつりの早此藥一服四五粒木

腹内充つとた漸く身体も温を生じ終其危急を救ふ宝丹の大効

霍乱の吐瀉たけり暴瀉ハ後痛もあらざる前を用るは奇効を得

明治七年甲戌十二月再改正

東京池之端仲町

守田 治兵衛



明治六年七月改發付 同十一年戊寅六月再改正

5 10 15 20 25 30